



倉石武四郎
(一八九七—一九七五)

戸川芳郎

（著者）

ソ連・中国との交流に尽くした物故者百二十人の顕彰録が、「対中ソ外交物故労者顕彰祭実行委員会」(田中稔男代表)の手でまとめられた。二十日には国会構内の憲政記念館で、出版記念を兼ねた顕彰祭がある。

この、『朝日』紙(一九八六・一一・一一)の小記事によると、『顕彰録 対中ソ外交物故労者記念碑』八六・一一是、ア浅沼稻次郎からワ渡辺三樹男まで百二十人の、故人を知る人によるミニ評伝である。政財界の面々にならんで文化人のまじるなかに、中国学方面はわずかに金子一郎(一九〇五~八六)・藤田明保(一九一五~八一)・宮川寅雄(一九〇八~八四)といつたところ。そこへ倉石武四郎・吉川幸次郎(一九〇四~八〇)両名を加えたのは、先こう(九二・一〇・三一)亡くなつた新村猛氏であつた。

なぜこの時期にこんな碑集伝が編まれたのか、また人選のめどをどこに置いたのか、よくは判らない。ロシア学には、八杉貞利(一八七六~一九六六)・米川正夫(一八八一~一九六五)・木村彰一(一九一五~八六)らの名がみえる。新村氏からそんな情報とともに電話で依頼があり、松本昭氏と筆者が、倉石・吉川両氏の碑伝を分担して執筆した。

松本氏は、倉石武四郎の伝賛をつぎのようにまとめた。

博士は、中国の古典に深い造詣をもち、ことに清朝小学、清代に発達した古代中国語研究について、西欧近代言語学の方法を加えて検討する新しい研究法を開拓した。その一方、現代中国語について、諸方言に至るまで綿密な調査と研究を進め、その基礎の上に中国語教育

に独自の方法を樹立しようと目ざした。

日本においては、漢字とその訓読の定着によって、中国の生きた言語そのものが学ばれることはごく少数の例外をぞいて、絶えてなかつた。したがつて日本人に中国語を教育するには、とにかく一度漢字(つまり日本語)から絶縁して、中国語そのものを学習させなければならない。それは、現代語・古典語を通じて同じであるべきだとの信念にもとづくものである。またこの観点から各種の語学辞典や教科書の編纂が企てられ、さらには中国語専修の学校を創設して中国語教育の普及と向上をはかつたのである。

博士の一生は、結局、この“中国へかける橋”である中国のことばの研究と教育が、真に日本に根づくために捧げられていた、といつてよいであろう。

『岩波中国語辞典』『岩波日中辞典』がその著作を代表し、そして、東京・小石川の日中友好会館に隣る日中学院が、倉石の創設し終身經營した中国語専修の学校である。

「倉石武四郎博士伝略」(著者不明)によれば、戸川芳郎稿、七九・九・一一(『中国語学』二二六、一九七九・一、中国語学会)に沿つて、経歴を紹介しよう。

倉石武四郎博士は、新潟県高田町(現、上越市)において明治三十年(一八九七)九月二十一日に誕生した。倉石氏は高田の名家で、和漢の学に精しい人物を出し、たとえば佩翁先生(諱、典太)は安横良斎に学び、高田藩校の教授を勤めた。父昌吉氏は慶應義塾で福沢諭吉

の教えを受け、のち郷里で商業を営み、昭和五年に死去し、母みか刀自は国文学を嗜み和歌を作ったが、昭和三十年になくなつた。兄弟すべて十三人（四人は早逝）のうち第七子で、四男にあたる。

長兄太郎は、東芝タンガロイ会長、すぐ上の兄文三郎は、高田市助役。弟五郎は、ながく成蹊大学のドイツ語学を担当し音楽指揮者を兼ねた。妹カウは同郷の同学、お酒の学者坂口謹一郎の夫人。次弟六郎（元福岡気象台長）夫人は、同郷の先達閑野貞の息女である。末弟治七郎は、日本生命重役。

八歳のとき高田第一尋常小学校に入り、十四歳で県立高田中学校に進み、大正四年卒業、同年第一高等学校一部乙類に入学。中学のころから和漢の古典を好み、一高在学中から中国文学を志し、大正七年東京帝国大学文科大学に入学。支那文学科を専攻、卒業論文は「恒星管窓」。大正十年（一九二一）文学部卒業と同時に、中国の芝罘・上海・蘇州・南京・鎮江・揚州・杭州・紹興・寧波等に一ヶ月旅行し、また特選給費生として文学部副手を兼ね、大正十一年、進んで京都帝国大学大学院に転じ、主として狩野直喜博士の指導を受けた。また新城新藏博士の指導で中国古典の天文史料を集めめた。

一高では、ドイツ語の朗読を岩元楨にほめられ、ことばのリズムに關心をいだいたが、三木清や瀧川政次郎らと漢籍の会読にはげんでいた。東大に進み塩谷源教授に就いたが、卒業論文では天体分野説や古占星術をあつかつて、周囲を驚かせた（用語は、漢文）。すでに歐米言語の音読か

ら推して訓説による中国古典文の詮解のしかたに疑問をもちつづけた倉石は、時の主任服部宇之吉教授にそれを質して不満を残したまま、「文学革命」を紹介した青木正兒らの「支那学」誌の進取に刺激され、上京時の狩野を訪うて京大ゆきを讀うたといふ。

そもそも漢学・支那学と中国学、東洋史と東洋学・東方学、この二系列の學問は、近代日本アカデミズムの特産である。國際化のただ中で、いやむなく対応の迫られる現今の中日学になぞらえられる。

明治開化後のわが国が、歐米列強の文明基準にまなんて拡張進出の政戦両略路線をとる、その国策に応じて大陸をつつむ東アジアをあくまで批判的対象として相対化する研究方向をとつた後者にたいし、前者は立憲君主政体にみあう民族アイデンティティのために、仏教的インド文明や礼教的シナ文化のその源流は認めつつも、これまた歐米文明に対処しうる日本化道義すなわち東洋倫理の構築に奉仕すべく、教育界を影響下においた。日清・日露両戦役をへて明瞭に目的的な学術傾向を基底にそなえた点で、この二系統ともども共通してナショナルな利害に立つ特徴をもつ。

後者は、東西両大学の東洋史学の動向に代表され、前者は、数奇な転変をかさねた東大の漢学系と高等師範の漢文科の連繫にみられる教学部門での活動に、それぞれその特色を發揮した。

その間にあつて、支那かぶれと称されたsinologist 狩野直喜らを中心に、支那学が京大文科に

形成されつつあった。停滞中国を近代化の欠如態として軽侮するのではなく、それ自体のもつ意味を評価しようと企てたその中国理解の方法に、倉石はふかく共鳴したのである。

後年、東大に転任を要請された倉石は、狩野の没年までは京都を離れることができなかつた。

大正十三年、大谷大学文学部に助教授として出講（支那文学史等を講述）、また京都大学附設第七臨時教員養成所の講師となり、この間、豊子夫人と結婚（四男二女を儲ける）。大正十五年、京都帝国大学文学部専任講師、翌昭和一年四月、同助教授に任せられ、大正十五年から『支那学』誌の編輯、のち『狩野教授還暦記念支那学論叢』（弘文堂書房、昭三刊）の編纂に当たつた。

夫人豊子の父は、岩の原アドウ園主でその晩年『武田範之伝—興亜前提史』を著わした川上善兵衛（一八七〇—一九四四）である。

昭和三年（一九一八）三月、文部省在外研究員として北京に駐在、はじめ東城の延英社に寓し、吉川幸次郎氏と同宿、のち西城の孫人和氏宅に移り、北京大学・師範大学・中国大学に聽講（吳承仕・錢玄同・孫人和・馬裕藻・朱希祖ら諸氏の講義あり）、また雪橋講舍（楊鍾義氏）において掌故を修め、北京滞在中の胡適・周樹人（魯迅）ら諸氏に会見、また山西（太原・臨汾・洪洞・曲沃・翼城・大交・聞喜など）に遊び、また別に、東方文化学院京都研究所のために書籍（天津の陶湘氏の蔵書）購入に尽力（これによつて同所所蔵の漢籍中、叢書の部

の基幹が形成された。）のち狩野直喜所長の下において、同所漢籍目録・同分類目録が編纂されたが、このことにも参与した）、その後、昭和五年六月に至り、北京を離れて上海に遊び（章炳麟氏を訪問）、かねて無錫・常州・南京（黃侃氏を訪問、八千卷樓の書籍を閲覧）を巡つたが、病いのため旅行を中止し、その八月帰国した。

北京留学中の右の伝記は、その後半を記す倉石「述学齋日記」（昭五、元旦～八月五日）によつて裏づけられ、交際した五十余名の学人の名が蘇る。なかに、当時すでに斯学のうちで倉石がいかに囁きされていたか、を知る資料が見つかる（「日記」はすべて漢文）。

先師劍西先生在日、曾來北京、泊扶桑館。君（中江丑吉）訪之、談及東西大學優劣。先師曰「東不如西也。然今有倉石生者、雖年少、現在京都留学、渠歸東之日、東都必有生色」。噫、此語雖過獎、而先師推挽出此。豈不可。書詣紳々哉。先師墓草、既宿而未掘。感愧何堪。
(五月六日)

先師劍西先生とは、東大で日本漢文学史を教わつた岡田正之（学習院教授、一九二七）のこと、倉石は終生、岡田の真摯な講義に推服した。そのノートが伝わつてゐる。

帰国後、京都大学文学部において清朝許学・清朝音学などを講ずるほか、魯迅（『呐喊』など）を講読、また中国語教育を推進、多くの教科書を著わした。昭和十四年に至り、学位請求論文「段懋堂の音学」によつて文学博士の学位を受け、同年（一九三九）四月、京都帝

国大学教授に任じ、東京帝国大学講師として出講、翌十五年からは東京帝国大学教授を兼ねた。

204

最晩年、病床の枕頭にあつたのが、京大での初期の講義ノートであつた。

- 清朝詩学 坂説文段注解題 昭六 自筆墨書
- 清朝音学 上篇 昭七 自筆墨書
- 清朝音学 下篇 昭八 自筆墨書
- 清朝音学 統篇 坂小学階梯昭九・一〇年自筆墨書

清朝音学資料（油印） 錢大昕「与段若膺書」「音韻答問」、戴震「転語二十章序」、段玉裁「答丁小山書」「江氏音序」「答江晉三論韻」

- 小学歴史 昭一一 自筆墨書
- 清朝音学 完 昭一一 自筆墨書
- 小学通論 昭一二・一五 自筆墨書

東大兼任は、退官した塙谷温教授の後任に擬せられ、倉石の後輩で漢籍書誌学に長じた長沢規矩也（一九〇一～八一）の開拓によるといわれる。

京大で培つた教育と研究方法は、学風を異にした東大においても實いた。経学・詩文をとわず旧来の訓読法を、留学を機に「文海灘に捨ててきた」ときびしく排除して、音読法の授業を徹底して「支那語」教育の革新化を図り、かつて塙谷がその一部を分担した『国語漢文大成』は訓読

を本位とするため、倉石の兼任後、東大研究室の藏書中から別置された。代つて、支那学の概説が講述された。

- 支那学の発達 昭一八 自筆墨書
- 本邦文芸学 昭一九 自筆墨書
- 支那における支那学の発達 昭二一 自筆墨書

これより先、昭和六年より東方文化学院京都研究所の研究員を兼ね、研究「札疏校讎」のもとに議札疏の校定を行い、昭和十二年一月「議札疏放正」を完成、研究所に報告した。また同所経学文学研究室主任としては、尚書正義校定の事業を始め、のちに主任を退いたが、そのための会議には常に参加した。

さて東西両大学兼任のころ、国語審議会委員等を依嘱され、昭和十八・十九・二十年には有栖川宮選学資金を受け（高田久彦氏と共に）、「現代吳語の研究」を行なつた。また戦後は東京大学理工学研究所の小幡重一博士とともに、同所の施設によつて中国語諸方言の実験的研究を開始、一方では近畿一帯の古寺院に伝わる仏典説誦方法から唐代古声調を探究した。中国語学研究会（現、中国語学会）を結成したのは、昭和二十二年（一九四六）十月である。結成以来、終始その会長に在任（昭和五十年十月まで）した。

昭和二十四年（一九四九）五月、東京大学教授専任として東京に移り、また日本学术会

倉石武四郎

205

議の第一期会員に当選、日本中国学会結成の事に参与。二十五年からは中国語講習会を主宰（二十五年は日中友好協会の名により、翌年より博士個人の倉石中国語講習会となり、会長として昭和四十二年九月の解散にまで及ぶ）、初めてラテン化新文字を教育に応用、一十八年からはNHK第一放送の中国語入門講座を担当（二十一年に及ぶ）。一十九年（一九五四）秋、中国学術文化観察団の一員として新中国（北京・西安・上海・杭州・広東）を見学した。この間、東京大学文学部に「中国の文化と社会に関する諸問題」の綜合講義を開き（二十五回度以降）、また「中国の変革期における社会・経済・文化の相関関係の研究」委員会（二十六年以降、文部省科学研究費による）を主宰、かたわらその言語文字問題の研究を担当、また、北方語研究会を結んで人民文芸叢書の方言を摘出・研究、また別に「ラテン化新文字による中国語辞典」を編纂・出版した（七分冊、昭三十三元刊）。

昭和三十二年（一九五八）三月、東京大学教授を定年退官し、その名誉教授となつた（のち、京都大学名誉教授をも追承）。一方、昭和三十年六月より『中国語』誌を発刊（現在に及ぶ）、中国語の普及につとめ、引きつづき新たに制定された漢語拼音方案による中国語辞典の編纂に全力を傾注し、昭和三十八年九月、『岩波中国語辞典』を公刊するに至つた。この間、昭和三十五年春、中国の文字改革観察のため、日本学術代表団として中国を訪問した。

昭和三十九年（一九六四）十月、小石川の善隣学生会館に中国語専修学校「日中学院」を設立し、終身その学院長として、教育と經營に力を尽くした。みずから中国語初級・中級を担当し、その教科書「中国語のくみたて」などを編み、かたわら学院の講師のために語学概説を説き、ながく段玉裁「說文解字注」を講じた。また、学校經營に伴う種々の困難に際し、身をもつて事に当たり、倉石中国語講習会が昭和四十二年の善隣学生会館事件のあと、同年九月解散のやむなきに至つたが、「日中学院別科」としてその学習の場を存続させ、各方面の支持を得た。

昭和四十九年、「中国語の研究と教育および辞典の編纂」により朝日文化賞を受賞したが、その前後より痛風と脳血栓をわずらい、同年九月東京都養育院附属病院に入院、翌五十一年（一九七五）十一月十四日、屢次の脳血栓のすえ逝去した。享年、七十九歳。豊子夫人は、昭和五十三年（一九七八）六月五日、博士と同じ病院でなくなつた。七十五歳。夫妻とも、上越市高田の本誓寺内、円福寺に葬られる。（後略）

なお、倉石文庫は、清代学術を網羅する一大研究資料群であるが、いまは東大東洋文化研究所にその自筆の書目・ノート類とともに、一切収蔵されている。その文庫目録の公刊が待たれる。

◆主要著書・評伝

倉石武四郎著作集Ⅰ ことばと思惟と社會（解題 戸川芳郎 附「遺稿」）くろしお出版 一九八一・

- 倉石武四郎著作集II 漢字・日本語・中國語(解題) 賴 唯勤 附「遺稿」 くろしお出版 一九八
一・六 附「倉石武四郎博士論著目録」
- 儀禮疏攷正(上・下) 東大東文研「東洋学文献セントラル叢刊」 一九七九・三
- 目録学 東大東文研「東洋学文献セントラル叢刊」 一九七三・三
- 支那語教育の理論と實際 岩波書店 一九四一・三
- 漢字の運命(岩波書店) 一九五一・四
- 漢字からローマ字(—中國の文字改革と日本 弘文堂) 一九五八・五
- とろ火 倉石武四郎隨想集 くろしお出版 一九六〇・三
- 中國語五十年(岩波新書) 一九七三・一
- 中國へかける橋 亞紀書房 一九七七・四



辻 直四郎
(一八九九-一九七九)

..... ◆ 風間喜代 一一一